

《投稿論文》

## ガーフィンケル信頼論再考

浜 日出夫

### Ⅰ 「他者の知覚」から「信頼」へ

筆者は、別稿〔浜,1992〕〔浜,1995〕において、ガーフィンケル (Garfinkel,H.) が博士論文『他者の知覚』〔Garfinkel,1952a〕において行った、パーソンズ (Parsons,T.) の「ホッブス問題」に対する批判を検討した。ガーフィンケルの批判は、パーソンズによるホッブス問題の解決の仕方に向けられたものではなく、ホッブス問題というパーソンズの秩序問題の定式化そのものに向けられたものであった。

パーソンズが、複数の行為者の間での対象の間主観的同一性を前提としたうえで、「同じ」対象の獲得をめざす行為の集計態という、行為の事実性のレベルで、秩序の可能性を問うたのに対して、ガーフィンケルは、そもそも複数の行為者の間で対象が「同じ」であることはいかにして可能かという、より根源的な、行為の前提のレベルで、秩序問題を問うている。筆者は、ガーフィンケルによってみいだされた、この新たな秩序問題を、映画『羅生門』にちなんで、「羅生門問題」と呼んだ〔浜,1995〕。

この秩序問題の転轍は、しかし、ガーフィンケルを困難なアポリアへと導いた。それは、ガーフィンケルが同一説という立場をとっていたことによる。対象を知覚から独立したものととらえる対応説においては、科学者が、対象が「本当は」なんであるかを決定する特権的な観察者の地位を占め、この科学者の知覚を基準として、知覚の間的一致を判断することができる。しかし、同一説によれば、対象は各自の知覚の構成所産であり、知覚の間的一致を判断するような特権的な観察者はもはやどこにも存在しない。同一説の立場に立ちつつ、対象の間主観的な同一性という問題の解決をみいだそうとしたことによ

て、ガーフィンケルは、フッサールが超越論的主観による間主観的世界の構成を説明しようとして陥ったアポリアと同型のアポリアに達着したといえる。

ガーフィンケルは、博士論文では、このアポリアに取り組むことを回避した。すなわち、ガーフィンケルは、博士論文においては、複数の行為者の間での対象の間主観的な同一性を問題にするかわりに、単独の行為者によって知覚される対象の秩序が組織化されるための条件を考察している。だが、複数の行為者の中の間主観的な秩序の可能性と、単独の行為者によって経験される主観的な秩序の可能性とは異なるものである。ある行為者によって経験されている秩序（「他者についての知覚」）が組織化されていることは、その秩序が、「他者が知覚している秩序」と同じであることを意味しない。ドン＝キホーテが経験している世界は完全に組織化の条件を満たしているが、このことは、ドン＝キホーテの世界がサンチョ＝パンサの世界と同じであることを保証しないのである。ガーフィンケルは、結局、博士論文では、自らが新たに定式化した秩序問題に解決をみいだすことはできなかったといえる。

ガーフィンケルがあらためて世界の間主観的同一性という問題に取り組んだのが、1963年の論文「安定した協同行為の条件としての『信頼』の概念、およびそれにかかわる実験」（以下、「信頼」論文と略）[Garfinkel, 1963]である<sup>(1)</sup>。この論文は、そのタイトルが示すように、複数の行為者の中での相互行為の可能性の条件を主題としている<sup>(2)</sup>。そして、その条件を、ガーフィンケルは「信頼（trust）」と呼んだ。

## II 秩序問題の解決としての信頼

### 1 三目並べ実験

ガーフィンケルは、「信頼」論文の冒頭で、相互行為の可能性の条件を明らかにするための方法について次のように述べる。「協同行為の特徴の持続を説明するのに、ふつう社会学者は、活動の組織の安定した特徴のセットを取り出

し、それらの特徴の安定性に寄与している変数をさがし求める。別のやり方のほうがもっと経済的だと思われる。すなわち、安定した特徴をもつシステムから出発して、トラブルを引き起こすにはどうすればよいかを問うのである〔Garfinkel,1963:187〕。この「別のやり方」こそ「違背実験」である<sup>(3)</sup>。

ガーフィンケルは「安定した状況」の例としてゲームを取り上げる。そして、ゲームの秩序にトラブルを引き起こすことによって、逆にゲーム秩序の維持に寄与している要因を可視化するために行なわれたのが、「三目並べ実験」である。三目並べとは、3×3の升目に2人のプレイヤーが交互にマークを置き、先に三目並べたほうが勝ちというゲームである。この実験では、実験者は、何食わぬ顔をして相手のマークを動かして、自分のマークを置く。ガーフィンケルは被験者の混乱を予想した。結果は、以下の通りであった(表1)。

表1 三目並べ実験の結果(〔Garfinkel,1963:204〕より作成)

		三目並べの放棄		三目並べ の維持	計
		新しい秩序	未知の秩序		
混乱 の 程 度	混乱なし/少	(A) 26	(※) 36	20	81
	混乱中	3	46	32	81
	混乱大	1	33	51	85
計		30	114	103	247

(※) 35の誤りと思われる。

縦軸は、被験者の混乱の程度を表わしている。

横軸は、被験者が実験者のふるまいをどのように正常化しようとしたかを表わしている。被験者が、なにも問題が存在していないかのようにふるまい、実

験者が新しいゲームをはじめたととらえた場合、被験者は、三目並べを放棄して、新しい秩序をうちたてたとみなされた。被験者が、なにかトリックが隠されているとか、実験者がなにか未知のゲームをはじめた（たとえば、自分に言い寄ろうとしているのではないか、自分を馬鹿にしているのではないかなど）ととらえた場合、被験者は、三目並べは放棄したけれども、代わりに秩序をみつけるにいたっていないとみなされた。被験者が、実験者は三目並べでいかさまをしたととらえた場合、被験者は三目並べの秩序を維持しているとみなされた。

この結果は、実験者が新しいゲームをはじめたと考えた被験者には、ほとんど混乱がみられず、三目並べは放棄したけれども代わりに秩序をみつけれなかった被験者には、より多く混乱がみられ、三目並べの秩序のなかで正常化を図った被験者に、もっとも大きい混乱がみられたことを示している。

ガーフィンケルはこの結果を信頼概念を用いて説明する。

## 2 ガーフィンケルの信頼概念

ガーフィンケルは、ゲームを構成する出来事を定義するものを「基礎的ルール」と呼ぶ。三目並べの基礎的ルールは、 $3 \times 3$ の升目を用いる、2人のプレイヤーが交互にプレイする、最初のプレイヤーは空いている升目のどこかに自分のマークを置く、次のプレイヤーはつづいて、残っている升目のうちのどれかに自分のマークを置く、等々である。基礎的ルールは次の3つの特性を備えている。

- (1) ゲームの範囲 [ $3 \times 3$ の升目など]、プレイヤーの数、プレイの順序などについて、選択肢が数多くあるなかで、基礎的ルールは、プレイヤーの観点からみると、自分の願望、状況、計画、利害、またその選択が自分自身あるいは他者に対してどんな結果をもたらすかにかかわらず、自分が選択することを期待している [選択肢の] セットを構成している。
- (2) プレイヤーは、自分を拘束しているのと同じ選択肢のセットが、他

のプレイヤーも拘束していると期待している。

(3) プレイヤーは、自分がそのことを他者に期待しているのと同じように他者もそのことを自分に期待していると期待している。

[ Garfinkel,1963:190 ]

すなわち、基礎的ルールは、(1) ルールの自分自身に対する妥当の期待、(2) ルールが、自分だけでなく、他者にも間主観的に妥当することの期待、(3) この期待が、自分だけの期待ではなく、他者と共有された間主観的な期待であることの期待、という3つの期待を特徴としている。ガーフィンケルはこれら3つの期待を「構成的期待」と呼んでいる。構成的期待は具体的なルールの内容からは独立しており、構成的期待を付与された選択肢のセットがそのつと基礎的ルールとなると考えられる。構成的期待を付与することは「構成的アクセント」の付与と呼ばれる。構成的アクセントが、ある選択肢から別の選択肢に移されると、新しいゲームが生まれる。たとえば、構成的アクセントが、3×3の升目ではなく、5×5の升目に付与されると、五目並べという新しいゲームが生まれる。こうして構成的期待を付与された出来事の相互に関連したセットは「出来事の構成的秩序」と呼ばれる。これがゲームの秩序である。そして、ガーフィンケルはこの「出来事の構成的秩序」に従うことを「信頼」と呼ぶ [Garfinkel,1963:190]。すなわち、信頼とは、構成的期待を付与された基礎的ルールに従うことである。これが信頼と呼ばれるのは、それが期待を本質的要素としているためである<sup>(4)</sup>。

このゲームの構成のモデルにもとづいて、ガーフィンケルは次のように述べる。

構成的期待の実効性が、ゲームにおいても、日常的状況においても、協同行為の安定した特徴の重要な条件として働いている。

[ Garfinkel,1963:200 ]

三目並べ実験は、ゲームにおいて、この命題を確証するために考案されたものである。この実験は、「構成的期待に違背する出来事が、ゲームの相互行為の構造の解体的な特徴や、ゲームの出来事のアノミックな特徴を増幅す

ること、そのような効果の度合は、ゲームの構成的秩序への動機づけられた随順の程度と直接結びついていること、そのような効果はプレイヤーのパーソナリティ特性とは無関係に生じること」[Garfinkel,1963:201]、これらを示すことを目的としている。要するに、この実験は、「ゲームの基礎的ルールの違背がアノミックな効果の一次的な決定要因であるか」[Garfinkel,1963:201]を問うために行なわれた。そして、実験の結果はこれを確証したものととしてとらえられている。ガーフィンケルによれば、実験結果は、次の2つの理論的主張を支持するものである。すなわち、第1に、「ゲームの構成的秩序と一致しない行動はすぐさま不一致を正常化しようとする試みを動機づける」[Garfinkel,1963:206]こと、第2に、「合法的プレイの違背という条件のもとで、プレイヤーが、構成的秩序を変更なしに維持しようとしつつ、不一致を正常化しようとする場合に、その[構成的秩序と]一致しない出来事は、もっともうまく無意味な状況を作り出すように思える」[Garfinkel,1963:206]、この2点である。2点目は、いいかえれば、ゲームの秩序への随順の程度が高ければ高いほど、すなわち信頼の度合が高いほど、基礎的ルールの違背は首尾よく混乱を生みだすということである。しかし、これは、信頼が強ければ強いほど、信頼が裏切られたときのショックは大きいという陳腐なことを述べているにすぎない。

ガーフィンケルは、実は、実験結果のなかに隠されている興味深い事実を見落としている。そして、それは、ガーフィンケルの信頼概念があいまいであったことと関連している。

### 3 実験の再解釈と信頼概念の再定式化

表1のなかのAのグループは、実験者が新しいゲームをはじめたと考えたために、ほとんど混乱がみられなかったグループである。ガーフィンケルの解釈によれば、この被験者たちは、三目並べゲームの秩序に対する随順の程度が低かったために、いいかえれば信頼の度合が低かったために、基礎的ルールの違背が混乱を生まなかったことになる。この被験者たちには信頼が欠けていたのであろうか。事態をもう少し詳細に検討してみよう。

このグループの被験者に関する具体的な報告がないので、次のような例を考えてみよう。たとえば、実験者が自分のマークを動かすのを見て、被験者A<sub>1</sub>が、相手のマークを動かしてもよいのだと考え、自分も相手のマークを動かして、ゲームを続けたとする。この場合、A<sub>1</sub>は三目並べゲームを放棄して、新しいゲームをはじめたと考えられる。ガーフィンケルが考えるように、この被験者には信頼が欠けているのであろうか。

実は、ガーフィンケルの信頼概念には、区別されるべき2つの内容が区別されないまま含まれている。さきに述べたように、ガーフィンケルは、出来事の構成的秩序に従うことを信頼と呼んだ。これを敷衍して、ガーフィンケルは次のように述べている。

①ある人々の共同的な環境の取り扱いが構成的期待によって支配されている場合、その人たちは互いを「信頼」していると言う。

[ Garfinkel,1963:193 ]

②ある人が別の人を「信頼」していると述べることは、その人が、行為を通して、プレイの基礎的ルールのなかに描かれている出来事の規範的秩序と一致するような出来事を現実にもみだすような仕方で行おうとしているということを意味している。

[ Garfinkel,1963:193 ]

①は、構成的期待による支配を「信頼」と呼んでいる。②は、基礎的ルールに従うことを「信頼」と呼んでいる。この2つの文章は間に1文をはさんで隣りあっており、ガーフィンケルはこの2つの説明を等価と考えていたと思われる。それは、ガーフィンケルが、「構成的期待の違背」と「基礎的ルールの違背」を互換的に用いていることからもうかがえる（たとえば [Garfinkel,1963:196,201]）。ガーフィンケルからすれば、構成的期待を付与された基礎的ルールによって定義されるのが出来事の構成的秩序であり、したがって、出来事の構成的秩序に従うことは、同時に構成的期待に支配されることであり、基礎的ルールに従うことでもあるということになる。しかし、ガーフィンケル自身述べているように、「3つの構成的期待はルールの現実の内容に対して不変である」 [Garfinkel,1963:200] とすれば、構成的期待に支配されることと、基

基礎的ルールに従うこととは、独立した事柄であると考えられる。記号を用いて整理してみよう。

構成的期待 (1) を  $e^1$ 、構成的期待 (2) を  $e^2$ 、構成的期待 (3) を  $e^3$ 、3つの構成的期待を合わせて  $E$  と表わすことにする。構成的期待を付与される選択肢を  $a$  と表わすことにすれば、基礎的ルールは  $E(a)$  と表わされる。選択肢には  $a^1, a^2, a^3, \dots, a^n$  とあり、構成的アクセントの移動によって、基礎的ルールも  $E(a^1), E(a^2), E(a^3), \dots, E(a^n)$  と変化する。このとき、 $E$  は、 $E(a^1), E(a^2), E(a^3), \dots, E(a^n)$  に対して不変であることから、個別の基礎的ルール  $E(a^n)$  に従うことと、構成的期待  $E$  に支配されていることとは、実は、等価ではない。 $E(a^n)$  は  $E$  を前提としているが、 $E$  は  $E(a^n)$  からは独立しているのである。人は、個別の基礎的ルール  $E(a^n)$  には従っていないまでも、構成的期待  $E$  には支配されていることがある。したがって、引用①で言われている信頼と、引用②で言われている信頼は、区別する必要がある。①の信頼は、相手がなんらかのルールに従っているであろうという期待を意味し、②の信頼は、相手がある特定のルールに従って行為するであろうという期待を意味している。相手がある特定のルールに従って行為していないまでも、相手がなんらかのルールに従っているであろうと期待することはできる。ここでは、仮に、構成的期待に支配されていることを「信頼0」、基礎的ルールに従うことを「信頼1」と呼んでおこう<sup>(6)</sup>。

もう一度、被験者  $A_1$  に戻ろう。相手が自分のマークを動かしたのを見て、 $A_1$  が自分も相手のマークを動かしはじめるとき、何が起きているのだろうか。 $A_1$  ははじめ構成的期待  $E$  を選択肢「相手のマークを動かしてはいけない」に付与することによって、基礎的ルール  $E$ （「相手のマークを動かしてはいけない」）に従って、三目並べゲームをしていた。しかし、実験者が自分のマークを動かしたのを見て、 $A_1$  は、構成的アクセントを、選択肢「相手のマークを動かしてはいけない」から、選択肢「相手のマークを動かしてもよい」に移し、新しい基礎的ルール  $E$ （「相手のマークを動かしてもよい」）に従って、新しいゲームをはじめたと考えられる。このとき  $A_1$  には信頼が欠けているのであろうか。たしかに、 $A_1$  はもはや、実験者が基礎的ルール  $E$ （「相手のマークを動かしてはいけない」）に従ってプレイすることを期待していない。信

頼1は破棄されている。しかし、 $A_1$ はいぜんとして、実験者がなんらかのルールに従ってゲームをつづけていることを期待している。 $A_1$ はいぜんとして構成的期待Eに支配されつづけている。すなわち、 $A_1$ は、構成的期待 $e^3$ にしたがって、実験者が、マークを動かすことを、実験者にとって妥当する「正しい」手であると考えているばかりでなく、 $A_1$ にも妥当する「正しい」手であると考えていると想定している。実験者の手を「正しい」手とするのは、選択肢「相手のマークを動かしてはいけない」ではなく、選択肢「相手のマークを動かしてもよい」である。 $A_1$ は、この想定にもとづいて、構成的アクセントを、選択肢「相手のマークを動かしてはいけない」から、選択肢「相手のマークを動かしてもよい」に移し、新しい基礎的ルールE（「相手のマークを動かしてもよい」）に従って、新しいゲームをはじめたと考えられる<sup>(6)</sup>。 $A_1$ が三目並べを放棄したのは、信頼が欠けていたためではなく、逆に、信頼0が機能しつづけていたためである。 $A_1$ の例は、信頼0が機能しているかぎり、信頼1が破棄されても、ゲーム秩序は修復されつづけることを示している。ガーフィンケルは、ゲーム秩序の構成を正確に定式化したにもかかわらず、信頼概念の二重性を見落としたために、ゲーム秩序が立ち上がる瞬間を取り逃がしてしまったといえる。

#### 4 信頼とゲーム秩序

以上の実験結果の再解釈から得られた知見を整理しておこう。

通常、ゲームはルールの共有のうえに成り立っていると考えられている。しかし、ガーフィンケルは、「『より根源的な』前提」[Garfinkel,1963:198]を求める。同一説に立つかぎり、ルールが「同じ」であることを前提とすることはできない。ルールの同一性がいかにして可能であるかがさらに問われなければならない。そして、ガーフィンケルは、ルールは、構成的期待、すなわちルールの間主観的妥当性の間主観的期待についての期待のうえに機能していることを発見した。

もし、ルールの共有という事実がゲームを成り立たせているのであれば、その事実が存在しなくなれば、ゲームも成立しなくなるはずである。しかし、三

目並べ実験の結果は、ルールの違背が自動的にゲームの崩壊をもたらすわけではないことを示している。Aのグループの被験者は、実験者のルール違反を知覚すると、構成的アクセントを移動させることによって、それを「正しい」手に変えてしまった。構成的期待が働いているかぎり、相手は、自分の手を「正しい」と考えており、かつそれがこちらにもあてはまると考えていると想定されるため、相手の手を「正しい」ものにするルールが探し求められる。すなわち、相手がゲームを続けていると考えられるかぎり、ルールはあとから考えだされるのである。この結果は、ゲーム秩序を支えているのはルールそのものではないこと、むしろルールは、構成的期待、すなわちルールの間主観的妥当性に対する信頼によって支えられているかぎり、妥当しているにすぎないこと、そして信頼が働いているかぎり、ルールは事後的に備給されうること、を示している<sup>(7)</sup>。

## 5 信頼と日常生活の秩序

ガーフィンケルは、三目並べ実験から得られたゲーム秩序に関する知見を、日常生活の秩序へと拡張する。「ゲームの出来事と日常生活の出来事とは構造的に同型ではない」[Garfinkel,1963:206]<sup>(8)(9)</sup>ものの、日常生活の秩序は基本的にはゲームの秩序と同じ構成をもっている。すなわち、「ゲームの基礎的ルールを定義する3つの特性[構成的期待]は、ゲームに特有のものではなく、アルフレッド・シュッツが日常生活の状況の構成的現象学に関する研究のなかで『日常生活の態度』と呼んでいる、諸々の『仮定』の特徴として、みいだされる」[Garfinkel,1963:209]。

日常生活の秩序を構成する出来事は、「他者と共通に知られている」という間主観的同一性によって定義されるが、この性格は、次の3つの期待によって作り出されるものである。

可能な選択肢のうちから、人は、(a)……を期待している。(b)それが自分にあてはまるように、他者にもあてはまると期待している。(c)自分が、それが他者にもあてはまると期待しているように、他者もそれが

こちらにあてはまると期待していると期待している。

[ Garfinkel,1963:209 ]

これら3つの期待は、それぞれ、ゲームにおける構成的期待  $e^1$ 、 $e^2$ 、 $e^3$  に対応しており、日常生活における構成的期待をなしている。そして、これらの期待を付与された、日常生活の諸仮定（ルール）<sup>(10)</sup>が、「他者と共通に知られている」という性格をもつ出来事からなる、日常生活の秩序を構成している。

ガーフィンケルが上の引用で述べているように、ガーフィンケルの日常生活の諸仮定に関する記述は、シュッツ (Schutz, A.) の自然的態度の構成的現象学にもとづいている。シュッツは、「他者と共通に知られている」という、出来事の間主観的同一性を生み出すものを、「視界の相互性の一般定立」と呼んでいる。

シュッツによれば、われわれは、日常生活において、社会的世界における位置と、それに付随するレリヴァンス体系とによって規定された、各自のパースペクティブから、対象を知覚している。したがって、「ここ」にいるわたしと、「そこ」にいる他者とは、対象の異なった側面を見ており、またそれぞれの生活史に由来するレリヴァンス体系も異なるため、厳密には、わたしが見ている対象と、他者が見ている対象は、「同じ」ではないのである。

そして、シュッツによれば、われわれは「視界の相互性の一般定立」によってこのパースペクティブのちがいを乗り越えている。「視界の相互性の一般定立」は、「立場の交換可能性の理念化」と「レリヴァンス体系の一致の理念化」という2つの仮定からなる。「立場の交換可能性の理念化」と「レリヴァンス体系の一致の理念化」は、それぞれ次のことを意味している。

もしわれわれが場所を変えて、私のここを彼のここに変換し、彼のここ — いま私にとってはそこである — を私のここに変換するならば、私も私の仲間も、共通な世界に関する同一の経験を典型的にもつてであろうということを私は自明視しており [ $e^2$ ]、そしてまた私の仲間も同じことを自明視していると私は想定 [仮定] している [ $e^3$ ]。

[ Schutz,1962=1985:148 ]

次のことも、反証が挙げられるまで私は自明視し [e<sup>2</sup>]、そしてまた私の仲間も同じことを自明視していると私は想定 [仮定] している [e<sup>3</sup>]。すなわちそれは、われわれの私的な<sup>レリヴァンズ</sup>関連性の体系から生じる諸々の相違は、当面の目的のためには無視できるということ、そして私と私の仲間、すなわち「われわれ」は「経験的に同一の」仕方で、言い換えれば、すべての実践的な目的にとっては十分に同一の仕方で、実際のあるいは潜在的に共通な諸々の対象、事実、事象を解釈している、ということである。

[ Schutz,1962=1985:148 ]

そして、シュッツによれば、「視界の相互性のこの一般定立が、共通諸対象の世界の前提であり、またそれとともにコミュニケーションの前提である」 [Schutz,1962=1985:148]。すなわち、「他者と共通に知られている」という、対象の間主観的同一性は、上の2つの理念化によって、いいかえれば知覚の一致の仮定によって作り出されるのである。そして、ガーフィンケルにとってもまた、「世界の同一性は立場の交換可能性の仮定による達成」 [Garfinkel,1963:213] にほかならない。

世界の同一性は、事実的世界によって課される不確定性のもとでも、この [立場の交換可能性の] 仮定を維持しうる人間の「能力」によって保証されている。 [Garfinkel,1963:213]

同一説においては、世界の間主観的同一性（「他者と共通に知られていること」）を、知覚の一致によって保証することはできない。知覚の一致を担保しうる特権的な観察者がもはや存在しないからである。同一説に立つかぎり、世界の同一性は、視界の相互性の一般定立、すなわち知覚の一致の仮定によって作り出されるものである。だが、この仮定は、構成的期待を付与されているかぎり、機能しうるにすぎない。したがって、世界の間主観的同一性を根底において保証しているのは、「この仮定を維持しうる人間の『能力』」すなわち構成的期待であると考えられる。

ガーフィンケルは、日常的状況においても「構成的期待の実効性が協同行為の安定した特徴の重要な条件として働いている」ことを示すために、一連の違

背実験を行なったが、そのひとつが会話実験である。この実験は、レリヴァンスの一致の仮定を破棄するために行なわれたものである。レリヴァンスの一致の仮定にもとづいて、「話し手は、他者が、自分の発言に、自分が意図している意味を付与するであろうと期待しており、したがって、いちいち確認したりしなくても何の話しをしているかどちらもわかっていると話し手が仮定することを、他者は認めるであろう、と期待している」[Garfinkel,1963:220]。ガーフィンケルは、この期待を可視化するために、学生たちに、友人や知り合いと普通の会話をしているときに、相手の当たり前の発言の意味を説明するように指示した。ガーフィンケルが報告している事例の一部は次の通りである。

(Subject)"I'm sick of him."

(Experimenter)"Would you explain what is wrong with you that you are sick?"

(Subject) "Are you kidding me? You know what I mean."

[ Garfinkel,1963:222 ]

われわれは、「あいつにはむかつく」と言うとき、レリヴァンスの一致の仮定にしたがって、「むかつく」という言葉は、(a)自分にとってむかつくことを意味しているばかりでなく、(b)相手にとってもむかつくことを意味していると仮定し、さらに(c)こちらが相手についてそう仮定しているように、相手もこちらについてそう仮定していると仮定している。被験者の"**You know what I mean.**"という発言は、われわれが会話において行なっているこれらの仮定を可視化したものと考えることができる。

会話は、通常、語彙や文法の共有のうえに成り立っていると考えられているが、ガーフィンケルのこの実験は、会話が、語彙や文法の共有にではなく、実は、語彙や文法の共有の仮定にもとづいて進行していることを示している。そして、この仮定もまた構成的期待によって支えられている<sup>(11)</sup>。ガーフィンケルは、ゲーム秩序と同様、日常生活の秩序もまた、構成的期待、すなわち日常生活の諸仮定の間主観的妥当性に対する信頼のうえに成り立っていることを示したといえる。

### III ひとつの帰結

ガーフィンケルが「信頼」論文において問うたのは、複数の行為者の間での世界の間主観的同一性の可能性であった。そして、ガーフィンケルが、違背実験を通してみだしたのは、世界の間主観的同一性を根底において保証しているのが構成的期待であること、いいかえれば、社会秩序はその根底において信頼によって支えられているということであった。最後に、この発見から導きだされるひとつの帰結について考えてみよう。

三目並べ実験をもう一度ふりかえてみよう。この実験において、Aのグループの被験者は、実験者が自分のマークを動かしたのを知覚すると、構成的アクセントを移動させることによって、ルールを事後的に発見し、それを遡及的に適用することによって、実験者の行為を正常化した。この実験は、われわれにウイトゲンシュタインのパラドクスを思い起こさせる。ウイトゲンシュタインは次のように述べる。

われわれのパラドクスは、ある規則がいかなる行動のしかたも決定できないであろうということ、なぜなら、どのような行動のしかたもその規則と一致させることができるから、ということであった。

[ Wittgenstein, 1953=1976:162 ]

クリプキは、このパラドクスを展開して、次のような奇妙な例を考え出した。わたしは57以上の数の加法計算をしたことがないとする。そして今、わたしは「 $68+57$ 」を計算しようとしている。わたしは、過去に行なってきた加法計算のルールに従って、「125」という答えを出す。そこに懐疑論者が現われて、わたしが過去に行なってきた計算のルールに従えば、答えは「5」であるはずだと言う。すなわち、わたしがそれまで従ってきたルールは、2つの数がどちらも57より小さい場合には加法計算を行ない、どちらか一方でも57以上であればすべて5になるというルールであった、と言うのである。このルールもまた、わたしが過去において行なった計算と完全に両立するものである。この奇妙な例は、いかなる行為も、それを正常化するルールを事後的に発見しうること、

いいかえると、ルールは行為を決定することはできないことを示している。「68+57」に「125」という答えを出すとき、われわれはルールに従ってそうしていると考えているが、実は、われわれは「暗黒の中での正当化されていない跳躍」[Kripke,1982=1983:18]を行なっているのである<sup>(12)</sup>。

三目並べにおいて、相手がマークを置いたあとに、自分のマークを置くとき、われわれは三目並べのルールに従ってそうしていると考えている。しかし、三目並べ実験が明らかにしたのは、ルールは、構成的期待に支えられているかぎりでは妥当しているにすぎないということであった。だが、ルールの妥当性が構成的期待によって保証されているということは、ゲーム秩序には、実は保証が存在しないということの意味している。というのも、構成的期待とは、ルールの間主観的妥当性の間主観的期待についての主観的な期待であり、それをさらに保証するものは、同一説に立つかぎり、存在しないからである。三目並べにおいて、相手がマークを置いたあとに、自分のマークを置くとき、われわれもまた、実は、「暗黒の中での跳躍」を行なっているといえる。

事情は日常生活の秩序についても同じである。日常生活の秩序が、立場の交換可能性の仮定を維持しうる人間の能力、すなわち構成的期待によって支えられているということは、実は、日常生活の秩序には根拠なるものは存在しないということ、日常生活の秩序は底が抜けていることを意味している。

ガーフィンケルが行なった別の会話実験はこのことを端的に示している。その実験では、ガーフィンケルは、学生たちに、一枚の紙の左側には、実際に話されたことを記録し、右側には、話し手がそれによって何を意味しているかを書くように指示した。ガーフィンケルが報告している事例の一部は次の通りである。

(Husband) "Dana succeeded	This afternoon as I was bringing Dana,our
in putting a penny	four-year-old son, home from the nursery
in a parking meter	school, he succeeded in reaching high enough to
today without	put a penny in a parking meter when we parked
being picked up."	in a meter zone, whereas before he had always
	had to be picked up to reach that high.

(Wife) "Did you take him to the record store?" Since he put a penny in a meter that means that you stopped while he was with you. I know that you stopped at the record store either on the way to get him or on the way back. Was it on the way back, so that he was with you or did you stop there on the way to get him and somewhere else on the way back?

[ Garfinkel,1967:25 ]

ガーフィンケルは学生にさらに説明するように求めるが、いくら説明しても、被説明項が増えるばかりで、「共有された合意」には到達せず、学生は説明を断念する。この実験は、会話が、なんらかの「共有された合意」にもとづいて進行しているのではなく、"You know what I mean."という仮定にもとづいて進行していること、そしてこの仮定の下は、底無しの深淵であることを示している。

## <注>

(1) 「信頼」論文に言及したものとして、[山田,1982] [樫田,1991] [岡田,1993] を参照。

(2) 博士論文から「信頼」論文への、問題の構図の変化は、「医学校にせ面接実験」の取扱いの変化のうちに読み取ることができる。博士論文では、「医学校にせ面接実験」は、「自然的態度の条件のもとで、動機図式が効力を失い、同時にかわりの図式が使えないとき、行為者の対象の秩序は組織化の条件を満たさなくなるだろう」

[ Garfinkel,1952b:2-3 ] という定理をテストするために行なわれた。すなわち、博士論文では、「医学校にせ面接実験」は、単独の行為者によって知覚される対象の秩序の可能性に照準している。これに対して、「信頼」論文では、「医学校にせ面接実験」は、「現実の社会的世界の行為の正しい基盤である『だれでも知っていること』の理解を破棄」 [ Garfinkel,1963:228 ] するために行なわれており、ここでは

同じ実験が、社会的世界における行為の可能性に照準している。(博士論文の実験は1949年にハーバード大学の学生を対象として行なわれた。「信頼」論文の実験はカリフォルニア大学ロサンジェルス校の学生を対象として行なわれている [Garfinkel, 1963:228]。対象となった学生数は同じ28名である。しかし、両者の間にはデータの重複がみられる。「信頼」論文で、[23 out of 25]と表記されている被験者の発言 "[Softly] Maybe I'm tired. (HG, "Eh?") [Burst of laughter] Maybe I didn't get enough sleep last night. - Uhh! - Well - I might not have been looking for the things that the other men were looking for. - I wasn't - Huh! - It puts me at a loss, really."

[Garfinkel, 1963:233] は、博士論文で報告されている被験者の発言 [Garfinkel, 1952a:490] と完全に一致する。不注意で混入したのか、意図的に流用されたのかは不明である。実験が一度しか行なわれていない可能性も考えられる。いずれにしても、博士論文から「信頼」論文への問題の構図の変化という本稿の論点には影響はない。)

(3)この意味で、違背実験は、ウェーバー (Weber, M) が述べた、「客観的可能性判断」のために行なわれる「思考実験」 [Weber, 1922=1972:18] と論理的に等価である。

(4)ルーマン (Luhmann, N.) によれば、「信頼」とは、「自分が抱いている諸々の期待をあてにすること」 [Luhmann, 1968 → 1973=1990:1] である。

(5)ジンメル (Simmel, G.) もまた、「弱められた帰納的知識」としての信頼と、「超理論的信仰」としての信頼とを区別している [Simmel, 1900 → 1922=1981:241f]。後者について、ジンメルは次のように述べる。「人びとは、ある人間を『信じる』が、この信頼はその人物の価値の証明によって正当化されないばかりか、さらには価値のその反対の証明にもかかわらず、しばしば信用しさえする。この信頼、ある人物にたいするこの内的な無条件性は、経験によっても仮説によっても媒介されず、むしろ他者たちにかんする心の原初的な態度なのである」 [Simmel, 1908 → 1923=1994:361]。後者が信頼0に、前者が信頼1に対応すると、一応考えることができる。

(6)正確に言えば、「新しいゲーム」ではない。新しい基礎的ルールは、最初の手にさかのぼって適用され、もともと「相手のマークを動かしてもよい三目並べ」であったとみなされるからである。

(7)このことは実験的状況においてのみ起こるわけではない。ひとりの少年が、フットボールのゲーム中に、ボールをつかんで、相手のゴールをめざして走りはじめたことが、ラグビーの起源となったことにみられるように、実際にも起こりうる

[ Magoun, Jr., 1938=1985 ]。

(8)原文は "game events are not structurally homologous with events of yesterday life." であるが、"everyday life" の誤りと思われる。

(9)ガーフィンケルは、ゲームと日常生活のちがいを、10項目にわたって整理している [ Garfinkel, 1963:207ff ]。主なものとしては、ゲームの時間は限られている（日常生活の時間は限られていない）、ゲームのルールは客観的である（日常生活のルールは主観的である）、ゲームは自由にはじめたり、自由にやめたりすることができる（日常生活は自由にやめられない）、ゲームのルールはあらかじめ知られている（日常生活ではルールはよく知られていない）、ゲームのルールはプレイの経過によって変化しない（日常生活のルールは経過とともに変化する）、ゲームではルールと実際のプレイは対応する（日常生活では例外的）などである。

(10)ガーフィンケルは、「他者と共通に知られている」という特徴を作り出している日常生活の仮定として、8項目を挙げている [ Garfinkel, 1963:210-214 ]。それらは、  
1 出来事の現われと意図された出来事の対応、2 世界の出来事に対する実践的関心、  
3 日常生活の時間パースペクティヴ、4 エト・セトラ仮定、5 対象の時間的同一性、  
6 共通のコミュニケーション図式、7 視界の相互性の定立：(a)立場の交換可能性の仮定 (b)レリヴァンスの一致の仮定、8 社会性の形式、である。

(11)グライス (Grice, H.P.) は、会話の格率として、1 質の格率、2 量の格率、3 関連性の格率、4 様態の格率、の4つを挙げたうえで、これら4つの格率を通底する原則を「協調原則」と呼んでいる。

われわれは、(他の事情が同じであれば)参加者が守ることを期待されている、おおざっぱな一般原則を、次のように定式化することができる。すなわち、会話のそれぞれの段階で、自分が参加している会話のやりとりの、受け入れられている目的や流れによって必要とされるような貢献をすること、これである。これを、協調原則と呼ぶことができる。 [ Grice, 1975:45 ]

会話における構成的期待は、相手が協調原則を守っているという仮定と考えることができる。次の例を考えてみよう ([ Levinson, 1983=1990:120 ] )。

A : Where's Bill?

B : There's a yellow VW outside Sue's house.

Bの発言は、文字通りに解すれば、Aの質問に答えておらず、量の格率と関連性の格率とに違背するものである。しかし、Bが協調原則を守っていると仮定されるかぎり、Bの発言は、協調的なものとして、したがってAの質問に対する答えとして解釈される。すなわち、Bの発言は「ビルは黄色いVWをもっており、ビルはスー一の家にいるのかもしれない」という含意をもつものとして解釈される。

(12) 「規則に従うこと」については、[大澤,1994: 第1章]を参照。

## <文献>

- Garfinkel, Harold 1952a *The Perception of the Other: A Study in Social Order*, Ph.D. Dissertation, Harvard University.
- \_\_\_\_\_ 1952b *Thesis Abstract: The Perception of the Other: A Study in Social Order*, Harvard University.
- \_\_\_\_\_ 1963 "A Conception of, and Experiments with, 'Trust' as a Condition of Stable Concerted Actions", Harvey, O.J.(ed.) *Motivation and Social Interaction* : 187-238, Ronald Press.
- \_\_\_\_\_ 1967 *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- Grice, H. Paul 1975 "Logic and Conversation", Cole, P. & Morgan, J.L.(eds.) *Syntax and Semantics 3* : 41-58, Academic Press.
- 浜 日出夫 1992 「現象学的社会学からエスノメソドロロジーへ」好井 裕明編『エスノメソドロロジーの現実』: 2-22, 世界思想社。
- \_\_\_\_\_ 1995 「エスノメソドロロジーと『羅生門問題』」『社会学ジャーナル』20 : 103-112.
- 榎田 美雄 1991 「アグネス論文における<非ゲーム的パッシング>の意味-エスノメソドロロジーの現象理解についての若干の考察-」『年報筑波社会学』3 : 74-98.
- Kripke, Saul A. 1982 *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Basil Blackwell. = 1983 黒崎 宏訳『ウィットゲンシュタインのパラドックス』産業図書。
- Levinson, Stephen C. 1983 *Pragmatics*, Cambridge University Press. = 1990 安井 稔・

奥田 夏子訳『英語語用論』研究社出版。

Luhmann, Niklas 1968 *Vertrauen*, Ferdinand Enke Verlag. → 1973 2.Aufl. = 1990 大庭  
健・正村 俊之訳『信頼』勁草書房。

Magoun, Jr., F. P. 1938 *History of Football from the Beginnings to 1871*. = 1985 忍足 欣  
四郎訳『フットボールの社会史』（岩波新書），岩波書店。

岡田 光弘 1993 「社会構成主義の現在—社会問題のエスノメソドロジ的理解を目  
指して—」『年報筑波社会学』5:1-46.

大澤 真幸 1994 『意味と他者性』勁草書房。

Schutz, Alfred 1962 *Collected Papers I*, Martinus Nijhoff. = 1985 渡部 光・那須 壽・西原  
和久訳『社会的現実の問題 [II]』（アルフレッド・シュッツ著作集第2巻），  
マルジュ社。

Simmel, Georg 1900 *Philosophie des Geldes*, Duncker & Humblot. → 1922 4.Aufl. = 1981  
元浜 清海・居安 正・向井 守訳『貨幣の哲学（分析篇）』（ジンメル著作集2），  
白水社。

\_\_\_\_\_ 1908 *Soziologie*, Duncker & Humblot. → 1923 3.Aufl. = 1994 居安 正訳  
『社会学（上巻）』，白水社。

Weber, Max 1922 *Wirtschaft und Gesellschaft*, J.C.B.Mohr. = 1972 清水 幾太郎訳『社会  
学の根本問題』（岩波文庫），岩波書店。

Wittgenstein, Ludwig 1953 *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell. = 1976 藤本  
隆志訳『哲学探究』（ウィトゲンシュタイン全集8），大修館書店。

山田 富秋 1982 「言語活動と文化的相対性—エスノメソドロジの自然言語をめぐ  
って—」『社会学研究』42・43:387-401.

(はま ひでお/筑波大学)